

アーモスト館館長オーテス・ケーリ教授

奨励	井上 勝也【いのうえ・かつや】
奨励者紹介	同志社大学名誉教授

自己紹介

講義を始めます前に、私の自己紹介をします。
私は一九三六（昭和十一）年に生まれまして、同志社大学には一九五四（昭和二十九）年に入学し、二〇〇四（平成十六）年に退職するまで、学生と教員の期間を合せますと丁度五十年間同志社大学と共に歩んで参りました。私の専門は教育学、教育史で、同志社の創立者新島襄を四十年近く研究して今日に至っています。またここ数年今日お話ししますオーテス・ケーリ教授について研究をしてきました。

同志社の独自性

それでは本論に入ります。皆さんのなかにはこの四月に同志社大学に入学された方、或いは昨年四月に入学された方が多いと聞いていましたが、現在三回生の学生さんもおられるかも知れません。まず最初に今年創立一三四年目を迎える同志社大学には他の大学にない、いい点が沢山ありますよ。京大にも立命館にもない同志社の独自性です。皆さんが学生生活を前向きになって、同志社の独自性を探し求められるならばそれが見えてきます。しかし待ちの姿勢ではダメです。新約聖書のマタイによる福音書七章七節に「求めよ、そうすれば与えられる」という聖句があります。私は現在七十三歳になりますが、これまで前向きで生きてきまして、多くのことを学びました。まだまだ学びたいことがあります。

建学の精神

さて、私立の大学は早稲田でも慶応でも、いわんや同志社でも創立者の建学の精神があります。同志社の創立者新島襄（一八四三―一九〇）は非常に明確な建学の精神をもっていました。そして一三四年たった今でも、いや今でこそ建学の精神を同志社に学ぶ学生さんに知ってもらって、自分は同志社の学生だという自覚というかアイデンティティーをもってもらうために、同志社大学では「建学の精神とキリスト教」という科目を開設し、春と秋に同志社スピリット・ウィークをもうけ、毎週火曜日と水曜日にチャペル・アワーがあるのです。

同志社大学設立の目的

私は先程新島襄は非常に明確な建学の精神をもっている、と申しました。彼は一八八八（明治二十一）年に日本中に公にしました「同志社大学設立の旨意」で同志社大学設立の目的を次のように明言しています。「其目的とする所ハ、独り普通の英学を教授するのみならず、其徳性を涵養し、其品行を高尚ならしめ、其精神を正大ならしめんことを勉め、独り技芸才能ある人物を教育するに止まらず、所謂の良心を手腕に運用するの人物を出さんことを勉めたりき」（『新島襄全集』1、一三二頁）と申しています。そして新島は、私学同志社では「自治自立の人民を養成する」（同、一三七頁）とも言っています。「良心」を自分の言動の基準にして、自らを自治自立の人民にするというのは、文字通り、他人に治められるのではなく、自らを治め、自らで立つことのできる主体的な人民という意味です。現代風にいえば、他人や国家の意見や情報に振りまわされることなく、自分のうちにしっかりした価値尺度をもっていて、それでもって何が正しいか、間違っているかを自らで判断し、行動することのできる国民をいうのです。新島は近代国家というのはそのような自立した人民によって支えられ、また牽引されねばならない、国家のいいなりについて行くような人民ではダメだということです。新島は今から一三〇年以上も前の明治の初期にこんな考え方をもっていたのです。同志社大学は、日本の状況、世界の状況を考えますと、ますます自治自立の人民を育成しなくてはならないと考え、どの学部に属している学生さんも自治自立の、即ち主体性のある人間になるように、カリキュラムが組まれているのです。

オーテス・ケーリ教授とは

ところで今日の主題は新島襄の建学の精神を語るのではなく、新島と同じ系譜に属するオーテス・ケーリ（Otis Cary）教授についてお話しいたします。ケーリ教授は一九二一（大正十）年宣教師の息子として北海道の小樽で生まれ、一九四七（昭和二十二）年という敗戦直後の日本に再びやって来て、同志社大学の教員となり、一九七九（昭和五十四）年まで今出川キャンパスにありますアーモスト館という学生寮の館長を勤め、一九九二（平成四）年定年で退職されるまで四十五年の長きにわたって同志社大学の教授としてお勤めになりました。今日はとりわけケーリ教授のアーモスト館館長としての教育実践をお話しいたします。

アーモスト・カレッジの全人教育

ケーリ教授のお爺さんは一八七八（明治十一）年、キリスト教の宣教師として来日し、一八九二（明治二十五）年から同志社の神学校の教授になっています。このお爺さんは新島が卒業したアーモスト・カレッジでは新島の二年後輩で、共にアンドーヴァー神学校で学んでいます。ケーリ教授のお父さんもアーモスト・カレッジの卒業生で、同志社の理事を勤めました。今日の主人公ケーリ教授も祖父と親子三代のアーモスト・カレッジの卒業生で、新島と同じ系譜に属すると先程申ししたのはアーモスト・カレッジのリベラル・アーツ教育（liberal arts education）即ち全人教育、トータルな人間の教育、知育・徳育・体育を片寄りなく受けて、木を見て森も見ることのできる人間、キリスト教主義にもとづいた徳育の重要性を認識し、人格陶冶、自分の人格を磨いて、先程申しました良心を言動の基準にもった自治自立の人間になることを目指す教育—このようなリベラル・アーツ教育に共感している点で新島とケーリ教授に共通点があることを今からいくつかの例を挙げながらご説明します。

ケーリ教授のアーモスト館での教育実践

それではただ今からケーリ教授のアーモスト館寮生との二十四時間の生活を通して彼が実践した教育の特徴を挙げてみます。①点目は主人性、あまり耳慣れない言葉ですが、この言葉はケーリ教授の造語です。教授は寮生たちに次のように申します。「寮の玄関で寮に来られたお客さんに接した者がアーモスト館の主人として対応しなさい。寮にかかってくる電話を受けた者がこの家の主人としてきちんと取り継ぎなさい」というのです。主人としての責任とリーダーシップとプライドをもって共同体の構成員すべてに満遍なく気配りができる人間になることが、将来社会や企業のリーダーになるために必要であることを若い寮生たちに理解させようとしているのです。これは日本の教育に欠けている点です。

②点目は、オルタナティブ（alternative）。これは二者択一というよりも「他に採りうる道」という意味に理解すべきです。日本人は概して一〇〇かゼロか、白か黒かといった単純なとらえ方をすることがあります。しかし現実には五十一対四十九という僅差でものごとが決まる場合があります。白か黒かではなくて、限りなく白に近い黒とか、その逆もあることをケーリ教授は寮生たちに理解させようとするのです。ものには表と裏がある。表だけ見て判断してはいけない。裏も見なさい。富士山を見る場合、太平洋側の田子の浦から見るだけでなく、山梨県側からも、それからヘリコプターに乗って上空からも見て、立体的・総合的な富士山をとらえて始めて富士山といえるのではないか。要するに多様な見方の大切さをケーリ教授は言われているのです。

私は五十年近く同志社大学で教師をしていました。私もケーリ教授とよく似たことを学生さんに語ってきました。例えば労資対立という場合、労働者の立場でのみ自己主張するのではなく、あなたが経営者の立場に立ったらどうするか。別の面が見えてくるよ、見方を変えれば、それまで見えなかった部分が見えてくるということです。私は戦中・戦後の厳しい時代を生き、大学紛争も体験しました。七十年以上生きて色んな経験をしてきた私は若い皆さんに申し上げたい。

十分の一にかけてみては

何かあることをしようとする時に、十分の九だめだ、成功しないだろうと思うことがある。しかし十分の一はうまくいくかも知れないと思えば、その十分の一にかけてみてはどうか。早々と諦めないでやってみよう。十分の一をだんだん膨らませていけば、不可能と思っていたことも可能になる場合があるよ、と言いたいのです。

B・フランクリン

十八世紀のアメリカにB・フランクリンという知恵者がいました。彼はタコを挙げて雷と電気が同じものであることを立証し、避雷針を発明した人といえば皆さんもよく知っているでしょう。彼は一七七六年のあの有名な独立宣言文の起草委員の一人です。アメリカの父ともいわれるフランクリンの好きな諺“*Heaven helps those who help themselves.*”「天は自ら助くる者を助く」。これはアメリカ人の人生観です。自ら努力する者はちゃんと神さまが見ていて最後には手を差しのべてくださる、という意味です。God とはいわずにHeaven と言っているところにフランクリンの幅の広さを感じますね。この諺は新島のいう自治自立の人民の育成につながるのです。ちなみにフランクリンの自伝が岩波文庫に入っていますからお読みしますよ。

質問・意見・反論をすること

③点目は、アーモスト館ではたびたびホールで懇談会、座談会が開かれました。講師は多士済々、すぐれた人材が選ばれています。例えば東大総長の矢内原忠雄氏やライシャワー駐日大使や同志社の前総長や相国寺のお坊さんやアーモスト館の寮生で留学して帰ってきた先輩など、色々な人が招かれています。この懇談会の特徴は講師の一方通行のお話ではなく、かならず出席者から質問、意見、反論することをケーリ教授は寮生に求めています。相互討論の場にするのです。日本の講演会は今でも一方通行で終わる場合が多く、せいぜい一、二名の質問者で終わります。もともと質疑応答は考えていない雰囲気です。ケーリ教授の頭の中にあるのはBC五世紀のギリシャのアテナイでおこなわれたシンポジオン（プラトンの作品に『饗宴』というのがありますが、この原名は「シンポジオン」で英語のsymposiumになります）です。シンポジオンというのは参加者がワインを飲みながら、エロース「愛とは何

か」を議論し合うのです。私が若かりし頃新島襄の学んだアーモスト・カレッジに留学していた時、このシンポジオンを体験しました。当初講演会だと思って参加したのですが、二時間のうち講師が問題提起をするのがせいぜい四、五十分で、あとは参加者がカリフォルニア・ワインを酌みかわし、大きなチーズの塊を自分でナイフで切り、それをかじりながらワイングラスを持って立ち話をするのです。講師は議論の材料を提供し、それを話題にして、お互いに意見交換をするのです。私は二五〇年前のシンポジオンが受け継がれているのだと思いました。要するに日本の講演者が一方的にしゃべりまくって終わるのに対して侃々諤々（かんかんがくがく）意見を闘わせる方が十倍も学問的収穫があるからです。十倍というのは私の判断で、五倍の人もいるし、二十倍の人もいるかも知れません。結局ケーリ教授が寮生たちに求めたものは、自分の意見をしっかりともちなさい、もつためには常に色んな情報を収集して考えなさい。そして他人の意見に耳を傾け、異なった考え方から学ぶ姿勢を身につけなさい。講演者が話すものの奥にある広い教養にも注目しなさい。講演者の人柄にも関心を向けなさい。講演者の三十分の話の中にはその人の生い立ちや学問的蓄積や人生経験や専門性やあらゆるものが凝縮されているのだよ、と言いたかったのです。もう一つ、講演者の話したことをただ拍手して終わるのは失礼だ、かならず感想を述べる、質問をするのがエチケットだということをケーリ教授は寮生たちに教えました。日本の学生さんは自分の意見を述べることを恥ずかしいと思い黙っている。ためらわずに質問してごらん。

自分の意見をもちなさい

私は皆さんに自分の意見をもつ努力をしなさい、と申したい。例えばオバマ大統領とはどんな人物で、どのようなヴィジョンをもっているかといった場合、色んな雑誌をひも解き、彼の就任演説を報道した新聞、例えば朝日、読売、日経、産経、赤旗の記事では各々少しずつ、あるいは大きく捉え方が異なります。一つの新聞論調だけで判断してはいけません。できるだけ色んな立場の情報を収集して、自分の考えを煮詰めていくのです。そうすれば質問や賛成意見や反対意見を述べることができますよ。人間形成、思想形成が一番重要な時期にある皆さんは寸陰を惜しんで勉強しないと四年間の大学生活はアツという間に過ぎ去っていきます。

英語で自分の考えを伝える

④点目に移ります。アーモスト館の一週間のうち火曜日はEnglish Speaking Day になっていて、日本語を使ってはいけない日なのです。ケーリ教授はアーモスト館が国際主義をかかげる以上、すべての寮生が英語で自分の考えを相手に伝えられるようになることを求めました。あわせて話す内容の深さ、広さを問いました。英語をしゃべりまくることがいいのではなく、話の中味が豊かであるかが重要だということです。日頃情報収集すると共に、毎日図書館で英字新聞に目を通し、vocabulary を豊かにしておくことが必要ですね。

留学しなさい

私は皆さんに在学中、同志社大学の留学制度を利用して是非一年間、或いは夏休みだけでもいい短期留学にチャレンジして下さい、と申し上げたい。「井の中の蛙」ではなく、大海を知った蛙になっていただきたいのです。留学する学年は早い方がいいですよ。一度留学すると今度は本格的に外国の大学院で勉強したいという気持ちになります。現在のようなグローバルな時代を生き抜くには日本と異なった文化圏を体験すること、そしてさまざまな視点からものを見、考え、行動することのできる人間になることが必要です。外国に行くと自分が日本人でありながら如何に日本の歴史や文化を知らないかを痛感します。

新渡戸稲造

新渡戸稲造の名前を知っているでしょう。札幌農学校の二期生で、彼は“Boys, be ambitious.” のW・S・クラークには直接習いませんでしたが、学問的影響を受けています。彼は国際連盟の事務次長をやりました。彼はアメリカのJohns Hopkins 大学に留学していた一八八五（明治十八）年に新島襄に会っています。新渡戸は数回同志社の今出川キャンパスに来て講演しています。最後は日本が国際連盟を一九三三（昭和八）年三月に脱退した直後の五月に、同志社の栄光館で「日本の将来と同志社の運命」と題して講演しています。（『同志社山脈』五五頁）。この新渡戸が一九三〇（昭和五）年に次のように申しています。「国際問題に関心をもちとする人は、まず祖国の大地に両足をしっかりと踏み張らねばならぬ。それから頭を上げて広い世界を見渡すのだ。そうすれば自分がどこに立っており、どこへ行かねばならないかがわかる。世界を知らないものは自分自身の国もわからない」。（『愛国心と国際主義』一九三〇年六月七日『新渡戸稲造全集』十六巻三五頁 教文館 一九六九年）同志社大学は建学の理念に国際主義をかかげています。そのような大学で皆さんは学んでいるのですから、せめて英語をマスターして外国に留学して、新渡戸のいうように、日本人としての誇りをもった地球人（global citizen）として活躍していただきたいのです。

礼拝の時間

いよいよ⑤点目に移ります。アーモスト館ではナイト・サービスといって水曜日の夜に礼拝の時間がありました。寮生やケーリ館長や奥さんのアリスさんが聖書を題材にして短かいお話をします。新島襄は同志社大学の建学の理念として「キリスト教主義をもって徳育の基本とす」（『全集』1 一三二頁）と述べていますが、その理由はキリスト教主義の道徳をもって知性をコントロールしなければ、研ぎ澄まされたナイフのようになって、自分にも他者にも危害を与えるからというのです。人間は人生の早い時期に超越者の存在を知り（旧約聖書の「伝道の書」一第二章一節に「幼き日に汝の造り主を覚えよ」というのがあります）、謙虚になることが重要だということです。同志社大学では火曜日にチャペル・アワーがあり、同志社科目を設け、春と秋にDoshisha Spirit Week を設けて創立者の考え方やキリスト者の生き方や同志社の歴史と伝統を学生諸君に語る機会をつくっています。その理由は同志社の学生さんには知性ばかり異常に発達し、自己中心的になって、他者の苦しみを理解しようとしにくい人間になっては困る。「人」という文字が示すように、我々はお互いに支え合い、助け合って生きていることを自覚し、過ちを犯し易い弱い我々が超越者によって赦（ゆる）され、生かされ、愛され、励まされていることを知ることが、人間として最も大切なことだと考えるからです。ケーリ教授は二代続いた牧師の息子として、寮生たちがキリスト教を自分の生き方に取り入れることを期待し、日曜日には教会に行くことを勧めるのです。彼自身も妻のアリスさんも平信徒ですが、彼らのキリスト教的生き方は寮生たちに感化力がありました。

⑥点目に移ります。アーモスト館では土曜日の朝は大掃除とスポーツに費やします。御所でハワイ寮や此春寮とソフトボールの試合をすることは寮生の健康増進と共に寮としての連帯、結束を強めることに役立ちました。“A sound mind in a sound body.” です。

学生と裸のつき合い

さて、ケーリ教授は寮生たちと同じ屋根の下に住み、一緒に風呂に入り、月曜日の寮会に参加して議論に加わり、徹夜することもありました。彼は寮生の留学を積極的に支援し、結婚の仲人を引き受け、就職の世話をし、寮生の親代りとなって彼らの面倒をよくみました。奥様はお医者さんでしたので、寮生にとっては頼もしい母親代りでした。

出会い 藤倉先生の場合

それでは次に一つの出会いがその人の人生を根本から変えることがある例をご紹介します。最初に藤倉皓一郎先生の文章を引用します。先生は一九五四（昭和二十九）年四月にアーモスト館に入寮されて三年間、そして大学院時代に二年間の五年間をケーリ館長と共に生活されました。このことが藤倉先生の人間的基礎をつくる上で決定的に大きな意味をもっていたといえます。藤倉先生は新島スカラーとしてアーモスト・カレッジに留学され、法学部教授、法学部長、東大、早稲田の教授をつとめられ、同志社にロー・スクールが創設されるに及んで、特別客員教授として現任ロー・スクールで教えておられます。藤倉先生のケーリ教授の追悼集に載せられた文章の一部を読んでみます。「ケーリさんは自分の時間、家族との時間を削って、寮生の一人一人と向き合ってくれました。私は卒業後の進路に迷ってケーリさんに相談したことがあります。私の話を時間をかけて聞いてから、ケーリさんは『今の状況の中で、君ができることを選ぶのではなくて、自分は本当は何がしたいかを考えてごらん』といわれました。これは、まさに私の目の鱗を落とすアドヴァイスでした。私は大学院に進み、出来れば留学しようと決めました。（中略）ケーリさんは四十年にわたって、アーモスト館で、同志社で、日本で、多くの人を育てました。私はその中の一人であることを感謝します。私にとってケーリさんは、私の人生を決定づけた人です」（『追悼オーテス・ケーリ』DAC 一六三頁 二〇〇七年三月刊）。藤倉先生はケーリ教授から、現状のワクの中で考えるのではなく、将来やりたいことを実現させるために現状を変えるという発想の転換をアドヴァイスされたのです。“Where there is a strong will, there is a broad way.” です。

北垣先生の場合

もう一人北垣宗治先生の場合を申し上げます。先生は一九四八（昭和二十三）年戦後再開されたアーモスト館の最初の寮生であり、先生は文学部教授として、そして大学紛争時には学生部長として、また一九七九（昭和五十四）年に降ケーリ教授に代ってアーモスト館の館長を勤め、一九九〇（平成二）年から新潟の新発田にキリスト教主義の敬和学園大学を創設するにあたって責任者となり、初代学長として十二年間勤められました。八十歳になられる先生は現在もお元気で、私共と新島襄の研究やケーリ家三代の研究のリーダー役を果たしておられます。先生の書かれた『オーテス・ケーリ先生を偲ぶ』から一部を読んでみます。「人間になる教育（最初略）私自身はアーモスト館という『ケーリ塾』で、先ず『人間になる』教育をしてもらったことを、生涯の好運であったと感謝している。山陰の片田舎から出てきた若者、そして敗戦まぎわに五カ月間だけ帝国海軍の学校で鍛えられた若者にとって、軍国主義の教育が作り上げてきたナショナルリズムの残滓を克服して『人間』になること、次に『世界市民』になることは、容易でなかった。ケーリさんは『ケーリ塾』の先頭に立つことなく、常に横にいて、脱落しそうな寮生をくいとめてくれた。ケーリさんとは何でもしゃべることができた。ケーリさんは確かに『アメリカ』であつたけれど、アメリカを超越していた。私がアメリカとイギリスの大学の奨学金を同時に得たとき、どちらを選ぶべきかを迷って相談にいくと、ケーリさんは言下にイギリスを奨めた」（『同志社時報』一二二号、六七一六八頁、二〇〇六年、十月刊）。北垣先生はアーモスト館で「人間になる教育」を受けた、と言われました。人間になる教育とはアーモスト・カレッジの目指すliberal arts education — 全人教育のことです。自分の立脚点を固め、困った時に自分で一生懸命になって考え、決断し、行動に移すことのできる強い自分をつくる教育を北垣先生はケーリ館長から受けたのです。

私は先程ケーリ教授のアーモスト館でおこなわれた教育実践の特徴を六点到整理して申しました。それらは各々自分という人間をつくる上で極めて重要なポイントです。

私は今日の講義の最初の部分で創立者新島襄は、同志社大学では「自治自立の人民」を教育することを目指しているのだと申しましたね。新島と同じアーモスト・カレッジで学んだケーリ教授も寮生たちを「自治自立の人民」に育て上げたいと考え、アーモスト館で二十四時間教育をされたのだと思います。

皆さんは寮に入ってケーリ教授のような教育者に会えることは現在では不可能になりました。しかし皆さんが積極的に求められるならば、同志社の四年間の授業やクラブ活動やチャ

ベル・アワーなどで自分を自治自立の人民に教育することは可能ですよ、と申し上げて、今日のお話を終えたいと思います。
ご清聴ありがとうございました。

二〇〇九年六月一日 同志社スピリット・ウィーク「講演」記録